

第80回麻布獣医学会 一般講演7

イヌにおける胃腸管間質腫瘍 (GIST : Gastrointestinal Stromal Tumor) の形態学的・免疫組織化学的検索

野村 真実¹, 奥田 裕也¹, 伊藤亜紀子¹, 金子 佳世¹, 班目 広郎²,
渡邊 俊文³, 宇根 有美¹, 落合 淳志⁴, 野村 靖夫¹

¹麻布大・獣医・病理, ²麻布大・附属動物病院, ³麻布大・獣医・外科1,
⁴国立がんセンター研支所/東大大学院・新領域創成科学先端生命科学分野・がん先端生命科学

【目的】

GISTは筋層間に多く見られる消化管運動のペースメーカーであるCajal細胞由来の腫瘍で, Cajal細胞はc-kit遺伝子にコードされたKITを発現している。医学領域ではGISTはKITに対する分子標的薬による治療の対象で, 抗c-kit抗体による染色結果は分子標的薬による治療適否の判断材料となる。イヌのGISTの報告は古い材料を再検索したものなどが少数ある。今後, 獣医学領域でも医学領域と同様の治療が行われる可能性があると考え, 剖検2例, 外科手術例2例, 検査機関においてGISTと診断された18例の全22例を抗c-kit抗体の免疫染色を中心に検索した。

【材料と方法】

5～15歳(平均10.3歳・年齢不明3例)までの雄13頭(去勢済3頭)・雌8頭(避妊済5頭)・性別不明1頭の22例の転移巢含む腫瘍部位(胃3・小腸5・盲腸11・結腸3・腹腔内腫瘍3・腸間膜リンパ節1・肺1)のホルマリン固定パラフィンブロックを4μmlに薄切後, HE染色, 抗c-kit抗体による免疫染

色を行った。

【結果】

腫瘍細胞は紡錘形・伸張型, 核周囲や細胞質内に空胞を持ち, 核の大小不同が多く, 配列は束状配列や交錯配列・花むしろ状配列が多く観察された。核分裂像はほとんどないものから, >20/10×HPFまでであった。抗c-kit抗体抗の免疫染色では前処理にクエン酸緩衝液を使用した場合は16例が細胞質に陽性を示し, EDTA緩衝液を用いた場合には全例が陽性を示した。

【考察】

ヒトのGISTは胃・腸上部に多発するのに対して, イヌでは盲腸に多発する傾向があり, 腹膜炎を併発している例が多く見られた。免疫染色では前処理に使用する緩衝液によって染色結果に差が現れることが認められ, 確定診断を下す際には十分に考慮する必要があると思われた。